



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	変異理論による文法的変異へのアプローチ Variationist Approach to Grammatical Variation
Author(s)	松田 謙次郎(KenjiroMatsuda)
<i>Citation</i>	Shoin Literary Review, No.33 : 35-42
Issue Date	2000
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

# 変異理論による 文法的変異へのアプローチ\*

松 田 謙次郎

(kenjiro@icis.shoin.ac.jp)

## 0. はじめに

社会言語学と言えば、言語使用者の（生物学的、社会的）性別、年齢、職業、人種といった社会的諸属性を説明変数として、被説明変数である言語使用に見られる何らかの変異の説明を試みる分野だというのが現在最も広く流布している理解である。さらに言えば言語能力（competence）の解明をその目的と標榜する生成文法に対して、言語の使用（performance）を分析対象とし、等質的な言語共同体という理想化モデルに対して言語共同体の非等質的（heterogenous）な性格を唱える社会言語学は互いに犬猿の仲であり、枠組みとして発足した60年代以来、今日に至るまで敵対関係にあるという情報までがいわば現代言語学の「常識」に含まれているのかも知れない。

そうした社会言語学の一分野であり、60年代の誕生以来一貫して言語変異・変化を扱ってきた変異理論（Variation Theory）に目を向けると、デパート調査で知られたLabovのニューヨーク調査（Labov 1966）を始めとして、英語の *-ing*、語末 *t/d* 消去現象といった一部の形態論的現象を除いては、変異理論初期の研究事例は大體音声・音韻レベルのものであった。

---

\*本稿の執筆に当たっては、平成11年度学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)／課題番号：11480052／研究代表者日比谷潤子／「現代日本語の音声・意味・文法・談話における変異と日本語教育」）を受けている。

それが変異理論の中心的定期刊行物である *Language Variation and Change* 誌の最新号などを見ると、樹形図あり最適性理論ありで、一瞬生成文法の専門誌かともがうような論文も散見する。「社会言語学=反生成文法」という古典的図式の信者には、にわかには信じ難い光景である。いったい変異理論は、いつの間にこのような変貌を遂げたのだろうか。

## 1. 変異文法研究史大略

音声・音韻中心の変異研究に本格的な文法レベルの研究が出始めたのは、Labov, Cohen, Robins and Lewis (1968) によるニューヨーク・ハーレム調査以降のことである。この調査では黒人英語の発音のみならず、繫合詞 (*be* 動詞) の変異等の文法レベルの研究も含まれていた。文法レベルに音声・音韻レベル分析で培われてきた手法を拡張する動きは、まさに1973年のGillian Sankoffによる論文 "Above and Beyond Phonology in Variable Rules" のタイトルそのままである。以後70年代を通してDavid/Gillian Sankoff, Labov, Naro, Rickford, Poplack, Cedergren 等により英語、フランス語、スペイン語、ピジン・クリオールの変異研究が一斉に開花の時期を迎える。

文法領域への拡張路線はWeiner and Labov (1983) で一つの転機を迎える。この論文を契機として音声・音韻レベルで開発された手法を単純に統語レベルへ敷衍することの賛否をめぐる論議—指示的同一性の問題—が起き、研究が一時停滞したのである (後述)。

80年代中頃以降、生成文法と変異理論が再び接近を始めた。この動きに大きく関与したのがペンシルバニア大学 (University of Pennsylvania) のAnthony Krochである。その業績の一つはKroch (1989) に始まる恒速度変化仮説Constant Rate Hypothesis (後述) であり、今ひとつはHelsinkiコーパスに統語構造情報を付したPenn-Helsinki中世英語コーパス (<http://www.ling.upenn.edu/~kroch/>) の構築である。これはブラウンコーパスに統語構造情報のタグを付したPenn Treebank (Marcus et al., 1993) の中世英語バージョンと思えばよい。これにより、構文の発達過程を生成

文法の枠組みで、しかも計量的に行うことが飛躍的に容易となった。文法変異研究のもう一つの中心地であるスタンフォード大学でも事情は似ている。John Rickford, Thomas Wasow等の協力体制からは、黒人俗口語英語 (BEV) の最適性理論的分析、英語 *as far as* 節の変異分析 (後述) が生まれてきている。

こうした新しい動きの陰の立役者は、計算機言語学である。時期を同じくして計算機言語学では経験的アプローチという名の下に大規模コーパスの構築・利用が盛んになりつつあった。言語能力か運用かといった哲学的な問題はさておいて、とにかく自然言語解析の効率的解釈を目標の一つとして標榜する以上、以前から自然談話の計量的分析を行ってきた変異理論に目が向くのは当然であろうし、フォーマルな方法論で文法体系を構築してきた生成文法の成果は計算機上の実装にも好都合なわけである。

またここで両大学に共通する組織上の利点を指摘しておくのも意味のあることであろう。それはペンシルバニア大学、スタンフォード大学両者共に言語学者と計算機学者が垣根なく共同研究を行える組織を持つことであり、前者の認知科学研究所 (IRCS, Institute for Research in Cognitive Science), 後者の言語情報研究センター (CSLI, Center for the Study of Language and Information) では、社会言語学と理論言語学の両者を含んだ言語学者と計算機言語学者、その他認知科学関係の研究者が共同研究を行い、相互のリソースを共有しつつ研究を進めている。工学部、文学部 (さらに国文科、英文科…といった分類が続き、それぞれの中での講座上の分類をつなげて良い) と同一キャンパス内で分散しているために、似通った問題意識を共有しつつも日常的な知的交流を育めずにいる日本の殆どの大学と対照すると、これら2つの大学がなぜこうした領域でめざましい発展を遂げたのかが理解されよう。

こうして文法変異研究は、「社会言語学 = 反生成文法」という旧来型図式を音を立てて打壊しつつある。冒頭で述べたように日本では依然旧来の「生成文法 vs. 社会言語学」という図式的枠組みで考えがちである。実は、両者の冷戦状態も終結期を迎えつつあるというのが、現在の客観的な「国

際情勢分析」なのである。

## 2. 研究例：英語 *as far as* 節の変異 (Rickford et al. 1995)

ここで実際の研究事例として、英語 *as far as* 節の変異をあげてみよう。英語 *as far as* 節では、その節尾に動詞句がつくつかつかないかで次のような変異がある：

(1) Now *as far as* misunderstanding **goes**, I'd just like to focus...

(2) *As far as* how he got shot  $\phi$ , we don't know yet.

Rickford et al. (1995) が明らかにしたのは、(a)動詞句のない用法が現在広まりつつあること、(b) *as far as* 節が、その名詞句の指示物の視点を表す場合には動詞句削除がカテゴリーカルに不可能であること (例：*And precious time ticking off as far as the Cowboys are concerned.*)、そして (c) 変異が名詞句 (上記 (1) の *the organized resistance* の部分) の複雑性、名詞句の韻律構造、媒体差、性、年齢といった言語内的・外的諸要因によって支配されていることであった。例えば名詞句の内部構造が複雑であるほど (例えば (2) の *how he got shot* のように文であった場合) 動詞句抜ききの構造が出やすくなり、同時に男性よりは女性の方が、そして自然談話、電子メール、書物の順で動詞句抜ききの構造を使いやすくなる。この研究の意義深い点は、社会言語学、理論言語学そしてコーパス言語学の三者がデータ・分析・解釈において見事に融合しているところであり、今後の統語的変異分析のモデルと言っても過言ではない。

## 3. 文法変異研究のトピック

さて文法変異研究からは、音声・音韻レベルの分析からは出てこなかった知見や問題点が見つかっている。ここで幾つか紹介してみよう。

### 3.1 指示的同一性 (referential sameness) の問題

例えば *car*, *harbor* などの英語 *r* の発音変異を調べるとしよう。仮に発音が *r*-あり、*r*-なしに分類できるとしたら、あとはそれぞれの発音を言語環境、発話スタイルや話者情報による頻度数を検討して、いつ [r] また

はゼロで発音されるのかを見ればよい。が、もしここで「[kar]と[ka:]」では指すものが違う。[kar]は2ドア車で[ka:]はその他総てだ」と話者が言い出したらどうだろう。その場合、話者は違うものを意図して発音し分けていることになる。単純にそれぞれの生起率を計算しても、それは日常会話の中で話者がどれほどの割合で *book* や *dictionary* という語を発話するかということと変わらない。ここから変異理論には、変異体の指すものが同じであること、変異体同士が同義の異なる言い方であるという前提があることがわかる。

この問題が明らかになったのはWeiner and Labov(1983)の英語の *by*-句のつかない受動形とその対応する能動形の研究とその批判からである。Weiner and Labov (1983) はこれらを同一変数の変異体と考えたが、Lavandera (1978) が2つの意味差をめぐって激的な反論を出し論争が始まった(Lavanderaの批判はWeiner and Labovの口頭発表に基づいているので発表順が逆になる)。これらの批判は、従来の前提のままで統語論的レベルにまで変異分析を拡張する動きに向けられていたが、Lavanderaも一定の条件が満たされるのであれば統語レベルの変異分析も可能であるとし、さらに問題発見的手法としては計量的手法にも一定の価値を認めていた。またJutrońić-Tihomirović (1987) の指摘の通り、同じ文法と書いても屈折形態論では指示的同一性の問題には抵触しない。しかしながら、指示的同一性は現在でも文法変異分析の重要課題であることに変わりはない。

### 3.2 文法的変異と社会的変異

文法的変異は、通常音声・音韻に比べて社会階層差が著しいという指摘がある(Chambers 1995:51ff)。例えば英語の二重否定(*We weren't interested in nothing to eat*), *hissself*, *theirselves* といった再帰形, *ain't* の使用(*We ain't interested*), またフランス語モントリオール方言に見られる補文標識 *que* 消去などの文法的変異ではすべて階層差が強力な要因である。但し、一般にこうした差が見られる場合、社会階層差というよりもそ

れと絡み合う変数である学歴差の反映という可能性も強い。両者を区別するには、大規模サンプルに基づいたより緻密な検討が不可欠なのである。

### 3.3 恒速度変化仮説

Bailey (1973) の唱えた波状仮説 Wave Theory は、一言語体系内で変化が早く始まる場所では変化が速く進み、遅く始まる場所では変化の進みも緩やかであると考えていた。これに対抗するのが Kroch の恒速度変化仮説で、ここでは変化速度はどこも同じであり、変化は総ての環境で同時に始まると考えられている。つまり仮に X 軸に時間、Y 軸に任意の変異体の占める割合を取り、各言語環境ごとにグラフ上に表したならば、総ての線 (= 各言語環境) は平行線になるわけである。波状仮説では各線は互いに平行にはならず、下へ行くほど傾きが緩やかになるわけである。

この仮説は文法レベルに留まるものではなく、音変化など総ての言語変化を射程に含めている。もし言語変化の進行と言語内的要因が独立であれば、時間の共時的反映である話者の年齢と言語内的要因も独立となる (Kroch, 私信 1995)。これは「可能な共時的言語変異の集合」に大きな制約を加えるものであり、Weinreich, Labov and Herzog (1968) の言う「制約の問題」 (constraint problem) を解く有力な鍵になるものと思われる。

## 4. 終わりに

文法研究は大量の自然談話データを必要とする領域である。インタビューでも、項目によっては質問を工夫すれば、話者に悟られずに能率的に用例を収集することが可能である (Matsuda 1993)。自然談話はアンケートデータと違い、違った項目の調査に使い回しが効き、一度録音さえ取っておけば後々までその恩恵に浴することができる。文字化をしておけば、もちろんその有用性は飛躍的に倍増する。残念ながら日本語で入手しうる長時間自然談話コーパスは多くはない。これから文法変異研究をしようとする人には、収集した録音資料の文字化、できれば音声を含めた電子化を早いうちから行っておくことを強く勧めて、本稿の締めくくりとしよう。<sup>1</sup>

---

1 変異理論的枠組みによる日本語分析については、Matsuda (1993), Matsuda (1995), 松田 (近刊) 等を参照されたい。

#### 参考文献

- Bailey, Charles-James N. 1973. *Variation and Linguistic Theory*. Washington, D. C. : Center for Applied Linguistics.
- Chambers, J. K. 1995. *Sociolinguistic Theory : Linguistic Variation and its Social Significance*. Oxford : Basil Blackwell.
- Jutronic -Tihomirovic, Dunja. 1987. Above Phonology and Below Syntax in Linguistic Change. *Variation in Language : NWAV-XV at Stanford*, ed. Keith Denning, Sharon Inkelas, Faye C. McNair-Knox and John R. Rickford. Stanford, CA : Department of Linguistics, Stanford University. 249-265.
- Kroch, Anthony S. 1989. Reflexes of Grammar in Patterns of Language Change. *Language Variation and Change*. 1 : 199-244.
- Labov, William. 1966. *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, D. C. : Center for Applied Linguistics.
- . 1969. Contraction, Deletion and Inherent Variability in the English Copula. *Language* 45 : 715-62.
- , Paul Cohen, Clarence Robins, and John Lewis. 1968. *A Study of the Non-Standard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City*. Philadelphia : U. S. Regional Survey.
- Lavandera, Beatriz. 1978. Where does the Sociolinguistic Variable Stop? *Language in Society* 7 : 171-81.
- Marcus, Mitchell P., Beatrice Santorini and Mary Ann Marcinkiewicz. 1993. Building a Large Annotated Corpus of English : The Penn Treebank. *Computational Linguistics* 19 : 313-330.
- Matsuda, Kenjirô. 1993. Dissecting Analogical Leveling Quantitatively :



- The Case of the Innovative Potential Suffix in Tōkyō Japanese. *Language Variation and Change* 5:1-34.
- . 1995. *Variable Zero-Marking of (o) in Tōkyō Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania. [Technical Report IRCS-96-20, Institute for Research in Cognitive Sciences, University of Pennsylvania; ftp://ftp.cis.upenn.edu/pub/ircs/tr/96-20 {part1, part2, part3}].
- Rickford, John., Thomas Wasow, Norma Mendoza-Denton and Juli Espinoza. 1995. Syntactic Variation and Change in Progress: Loss of the Verbal Coda in Topic-Restricting *As Far As* Constructions. *Language* 71:102-131.
- Sankoff, Gillian. 1973. Above and Beyond Phonology in Variable Rules. *New Ways of Analyzing Variation in English*, ed. C.-J N. Bailey and Roger Shuy. Washington, D.C.: Georgetown University Press. 44-61.
- Weiner, Judith and William Labov. 1983. Constraints on Agentless Passive. *Journal of Linguistics* 19:29-58.
- Weinreich, Uriel, William Labov, and Marvin Herzog 1968. Empirical Foundations for a Theory of Language Change. *Directions for Historical Linguistics*, ed. Weinfred Lehmann and Yakov Malkiel. Austin: University of Texas Press. 97-195.
- 松田謙次郎。(印刷中)。「東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸制約の数量的検証」。*『国語学』*。